



## 追悼

### 小川先生の思い出

矢嶋 里絵（首都大学東京）

日本社会福祉学会名誉会員、日本社会事業大学名誉教授、全国老人福祉問題研究会名誉会長等である小川政亮先生が、本年5月7日お亡くなりになった。1月、97歳の誕生日をご家族や教え子とともに迎え、4月には小川政亮賞受賞式が練馬のご自宅で行われた。受賞式でお会いしたばかりであった私は、突然の知らせに愕然とし、未だ大きな喪失感の中にいる。

先生は、東京帝国大学法学部を卒業後、日本社会事業大学教授、金沢大学教授、日本福祉大学教授を歴任し、埼玉大学、早稲田大学大学院で非常勤講師として教鞭をとられた。また、1963年朝日訴訟控訴審で原告側証人として証言以来、多くの社会保障裁判で、証言や意見書の作成、訴訟対策団体代表をつとめられた。

先生の研究姿勢は、社会保障を必要とする人々やその生活実態に接近し、それを基調に法律論を構築しようとするものであり、これは生涯揺らぐことなく貫かれた。

「権利としての社会保障」の生みの親である先生の業績は、『権利としての社会保障』（勁草書房1964年）はじめ極めて多数に上るが、主要なものは『小川政亮著作集』（大月書店2007年）全8巻にまとめられている。

はじめて私が先生にお目にかかったのは、早稲田のゼミである。「大学院生は研究者として対等ですよ」とおっしゃり、私の拙い報告にも常に丁寧に耳を傾けコメントされつつ、小さな文字でびっしり京大式カードに書き込まれるのに（先生は大変なメモ魔でいらした）、非常に緊張したことを憶えている。

学びの場は大学にとどまらず、社会保障研究会等の研究会、ご自宅での勉強会と様々であった。ご自宅での勉強会は、ときにマーラーの曲が流れる先生の書斎で行われた。そして書庫には膨大な本・雑誌・資料・研究メモ（後に明治学院大学等に寄贈されることになったこれら蔵書類は段ボール500箱を超えたという）が書棚に収まらず床にうず高く積み重ねられており、勉強会で話題となった文献が書庫に無かったことはなく、「あれはねえ」と即座にお持ちになったことに、一同しばしば驚嘆した。

また、教え子それぞれの研究テーマを熟知し、関連論文や資料等のコピーを、「研究は進んでいますか」というおたずねとともに、ときにユーモアあふれる言葉を記し

たお手紙(いつも記念切手が貼ってあった)を添えて送ってくださり、このお便りに、私を含め大いに励まされた人が多いと聞いている。

先生のご逝去がまだ信じられず、ご自宅を訪ねれば、いつもの笑顔で先生が迎えてくださりそうな気がしている。そしてまた、1994年に亡くなった「最高の伴侶」である美代子夫人の墓参を毎年欠かさなかった先生が(小川政亮『わが最高の伴侶たりし小川美代子追悼・遺稿集』文芸社2005年)、夫人と同じ金沢のお墓に眠ることになると伺い、少しでも喪失感を埋めることができればと思っている。

お世話になったことに深く感謝を申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。